

教育力を発揮しあう、 学びのコミュニティを 充実させていきたい

立命館 総長／立命館大学 学長 川口清史
まごめ／堀水潤 撮影／高橋貴恵



【総長プロフィール】1945年生まれ。京都大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。立命館大学産業社会学部教授、政策科学部教授(現在に至る)、教学部長、政策科学部長などを経て、2007年より現職。(社)日本私立大学連盟常務理事ほか役職多数。

【大学プロフィール】1869年に開かれた西園寺公望の私塾立命館を創始として1900年に創立。法学部、産業社会学部、国際関係学部、政策科学部、文学部、映像学部、経済学部、経営学部、理工学部、情報理工学部、生命科学部、薬学部、スポーツ健康科学部。

立命館大学は昨年、文部科学省の国際化拠点整備事業(グローバル30)に採択されました。背景には2000年に開学し、約2800人の留学生が学ぶ立命館アジア太平洋大学(APU)に対する高い評価もあるでしょう。本学ではAPU開学以前から国際関係学部の設置(88年)をはじめ国際系の教学領域を拡充させてきました。また、多彩な留学プログラムは、総合大学としてはおそらく日本一整備されていると自負しています。今後は、英語のみで学位取得可能なコースの新設などさらなる教育の国際化を進めるとともに、留学生の受け入れを積極的に行います。大学が果たすべき役割という観点から見たとき、それには2つの意味があります。ひとつはアジア全体の高等教育の発展に寄与すること。もうひとつは日本人学生が身近に国際体験をできるようにすることです。私はいつも「外国人の友人をもちなさい」と言っています。それは内外の違いを知るだけでなく、日本を見つめ直す機会となるからです。隣の席にいつも留学生がいる。そんな状況を作りたいと考えています。

国際教育と並び、私が焦点をあてたいのが学習者中心の教育です。教員は必要以上に教える必要はありません。それよりも学びのファシリテーターとなり、学生自身が学ぶ主体へと転換する局面を作ることが大切でしょう。これが本学の初年次教育の柱となる考えです。例えば、私も担当していた政策科学部の基礎演習はグループディスカッションやディベートを中心に進みます。議論や批判に慣れない新入生は戸惑いますが、そこで大きく思考法が転換します。後に多くの学部生がそこで鍛えられたと言います。グローバル・シミュレーション・ゲームなど政策決定を疑似体験する国際関係学部の演習も同様、学習者中心の学びといえます。

とはいえ本学は規模の大きな大学です。学部によつては教員が一人ひとりを丁寧に見るといつても限界があります。にもかかわらず、多くの学生が主体的、積極的に成長していく。それは学生が互いに教育力を発揮するピアエデュケーションの仕組みができているからです。例えば先ほどのディベートも実は、文献の調べ方から論の立て方まで、合宿を共にしながら指導してくれる上級生がいる。それによつて下級生の学習を援助する学生自身も成長するのです。こうした学びのコミュニティを広げていきたい。それが私の強い思いです。